

女性の参画で社会を変えよう

～あざれあ主催講演会「女性の健康と人権を守るために」より～

早乙女智子（さおとめともこ）さん
東京都出身。令和6年神奈川県湯河原町議会議員に初当選。現役の産婦人科医でもある。



世界経済フォーラムが2024年に発表したジェンダーギャップ指数※で、日本は146か国中118位でした。日本の順位を大きく下げている原因の一つが政治分野の評価です。日本における女性議員の割合は、国会で15.5%、地方議会では15.1%（令和5年2月、内閣府男女共同参画局）に留まっています。

2024年、神奈川県湯河原町議会議員選挙に初当選した早乙女智子さんは現役の産婦人科医です。12月に富士市で開催した講座のテーマは「女性の健康と人権を守るために」。日本が抱える課題と、早乙女さんが議員を志した背景について語りました。

※男女格差を示す指標。経済、教育、健康、政治の四つの分野ごとに算出される。

女性のことは女性が決めよう

女性の健康について考えたとき、妊娠・出産や性と生殖に関する課題の議論は避けられません。私は産婦人科医の立場から、この女性特有の健康課題は長年無視されてきたのではないかと思います。例えば、妊娠を望むか望まないか、妊娠した時に産むか産まないか。どんな避妊方法、中絶方法を選択するか、どんな出産を望むか。これらには女性が自分のために選択し、決める権利があるはずです。しかし、今の日本の社会や制度は、女性の健康や人権に配慮したものにはなっていないと思うのです。

妊娠や出産に関しては議論が活発になってきて、制度も整いつつあります。一方、避妊や中絶に関することはタブー視され、議題にすらあがりません。また、避妊や中絶に対し、女性にペナルティや罪悪感を強いる雰囲気があるように思います。中絶にパートナーの同意が必要であったり、避妊方法が男性主体のコンドーム

一辺倒だったり、女性が性に関する健康について主導権を握りにくく、主体的に決定することに枷があるのではないのでしょうか。

私は、このような現状を変えたい、妊娠・出産や性と生殖に関する課題で女性を困らせない社会にしたいと考えてきました。そして、そのためには、女性の身体や健康に関する制度を決める場で女性が発言する必要があると思います。私の発言に対し「女医さんは黙ってて」などと言われて、憤りを感じたこともあります。私は女性の体に起こることや女性特有の健康課題について、自分で決められない現状から一歩進み、女性が女性のために決められる社会にしていきたいです。女性議員が増えることで、それは実現できるのではないのでしょうか。





「女性の健康と人権を 守るために」

日時：2024年
12月11日（水）

会場：富士駅南
まちづくりセンター
（富士市）

参加者の声

ピルや妊娠出産のことなど、
当事者である女性に必要な
情報が届いていないという
現状を知って驚いた

女性が自分自身を
守るための情報を
得られる機会を創出する
必要性を感じた

女性の健康について、
国や自治体に「女性のニーズ」を
届けられる人が必要であり、
その重要性を感じた

健康と人権を守るためには、
どのような場が地域に必要なのか。
全ての人々が包括的な性教育を
受けられる機会を得て、
自分を助ける方法を知り
実行できる世の中になるよう、
小さなアクションを起こしたいと
エンパワーメントされた

早乙女先生の話は
若い世代にも
知ってほしい内容だった

「女性のことは
女性が決めよう」
という早乙女先生の言葉に
うなずいた

もし議論の場の半数が
女性だったら、女性のことは女性で
決められる社会になっていた
のではないかと思った

取材を終えて

女性特有の健康課題につ
いて、女性自身で変えてい
きたいと語った早乙女さん。
そのためには、女性の身体
や健康に関する制度を決め
る場にもっと女性の声が必要だ。

人口の約半分は女性なの
に、政治の場にいる女性は
2割にも満たない現状で
は、真の民主主義とは言え
ない。ジェンダー平等の社
会をつくっていくためにも、
女性議員をもっと増やす必
要があり、これは社会全体
の課題であると考えてる。ま
た、女性議員が増えること
を通過点として、さらに多
様性のある政治が実現すれ
ば、誰もが暮らしやすい社
会になっていくのではない
かと思う。

